ベストセレクション―「今」見るふくやまの名品

2025年4月3日(木)－6月29日(日)　会場：常設展示室

※月曜休館　ただし、4月28日(月)、5月5日(月・祝)、5月19日(月)は開館、5月7日(水)は休館
※開館時間　9:30~17:00　ただし、5月18日(日)は21:00まで、6月6日(金)、6月7日(土)は19:00まで
※学芸員によるギャラリートーク　4月20日(日)、6月8日(日)
※館長によるギャラリートーク　4月3日(木)、6月7日(土)
※ふくふくおはなし美術館(対話型鑑賞会)　5月5日(月・祝)、6月22日(日)　いずれも14:00より

――――みなさん、こんにちは。この展覧会は、「ベストセレクション」として、当館学芸員がそれぞれの専門分野から「名品」を選定しました。以前目にしたことがある、思わず納得の作品もあれば、学芸員の個性が反映された作品もあることでしょう。今日まで所蔵され、そして未来に受け継がれていく作品たちをどのように見ているのか、「今」いる学芸員たちに話を聞いてみましょう。

西洋美術 ――「名品」ってなあに?

――――さあ、それでは早速、展示室に向かってみましょう。今回の展覧会は、入口横で《愛のアーチのマケット》が出迎えてくれますね。

T学芸員:こんにちは、「愛のアーチ」は当館のシンボルにもなっていますね。美術館に向かう途中、アーチがあったこと、お気づきになりましたか?

――――はい、新緑の中にある赤いアーチは、とても目を引きました。そういえば、今回の展示は学芸員がそれぞれのジャンルを分担したと聞きましたが……。

T学芸員:おぉ、耳が早いですね。今回は館長含む6名の学芸員が作品選定に関わりました。私は、イタリア美術が担当なので、最初の部屋のイタリア美術作品を選びました。実は、この「愛のアーチ」を手がけた高橋秀さんも、イタリアに長らく住んでおられた福山出身の作家さんです。

――――そうなのですね！それにしても、なぜふくやま美術館にはイタリア美術の作品がたくさんあるのですか?

T学芸員:それは、コレクションに当館独自の色を出すことや、高橋秀、杭谷一東など福山出身でありながらイタリアでもおおいに活躍した作家がいることが主な理由のようです。開館当初から収集方針に「イタリアを中心とするヨーロッパ美術」を掲げ、37年以上前からコツコツ収集してきたことで、現在は150点以上の作品が所蔵されています。

――――なるほど、日本国内で「イタリア美術のコレクション」をもつ美術館はあまり聞いたことがないですね。では、やはりこの作品たちも「名品」ばかりなのですか?

T学芸員:そうですね、みなさんがよくテレビや図版で目にするダ·ヴィンチやミケランジェロの「名品」とはだいぶ趣が異なりますが、20世紀のイタリア美術史をたどる上で欠かすことのできない、貴重な作家の作品がそろっています。個人的には、こうした作品が当館に所蔵されるまでの歴史をたどると、日伊交流の過程がよくわかるので、戦後日本のイタリア美術の歴史を語ってくれる非常に貴重な作品たちだと思っています。

――――作品が語る歴史、まさに生き証人ですね。ちなみに、この中から一番見てほしい作品をひとつ選ぶとしたらどの作品ですか?

T学芸員:ひとつ選ぶとしたら……ルチオ·フォンタナの《空間概念》(No.10)です。フォンタナは20世紀イタリア美術において欠かすことのできない重要な作家です。なんせ、絵を描くべきカンヴァスに大きな穴をあけてしまいました。この作品もつい穴をのぞきたくなってしまいますね。穴をのぞき込むことで、この作品は2次元の絵画から、3次元の彫刻へ、次元を超えてしまっているわけです。21世紀になると多くの作家が作品を3次元から展示空間へ、さらには都市空間へとどんどん拡張していって、今ではデジタル領域にまで広がっていますが、振り返るとこのフォンタナにまでさかのぼれるわけです。また、表面は銀色でおおわれていますが、このキラキラとした光の反射は、水の都ヴェネツィアのイメージだそうです。晩夏のヴェネツィアの水面がきらめく様子が目に浮かびますね。

――――写実的ではないのでとっつきにくいな、と思っていたのですが、そんな楽しみ方があったとは。まとまってイタリア美術の作品を見られることも珍しいですね。

T学芸員:私も「実はふくやま美術館にこれだけのイタリア美術の作品があるんだ」ということを、より多くの方に知っていただけたらと思っています。福山在住の方に、こんな面白い作品があったのか、と当館を身近に感じていただきたいですし、市外や県外、さらには世界の方々にも、「イタリアに目を向けた美術館があるぞ」と興味を持っていただきたいですね。そうしてより多くの方に作品を見ていただき、後世へ「名品」をつないでいきたいです。

No.10　ルチオ·フォンタナ《空間概念−銀のヴェネツィア》
1961年
©Fondazione Lucio Fontana, Milano by SIAE & JASPAR 2025 G3834

No.7　ソニア・ドローネー《色彩のリズム》1953年

S学芸員:当館所蔵の西洋美術はイタリアだけではありません。珠玉のフランス美術作品も所蔵しています！

――――あ、後ろからS学芸員が！ ふくやま美術館にはイタリアだけでなく、フランス美術の作品も数多く所蔵されているのですね。

S学芸員:はい、今回展示されるクールベやパブロ·ピカソ、マルク·シャガールだけでなく、ラウル·デュフィやアルベール·マルケ、マリー·ローランサンなど、珠玉のフランス美術コレクションがあります。これらの多くは、井原市で病院を経営しておられた安田博志氏から2012年に寄贈されたもので、20世紀のヨーロッパ美術をバランスよく集め、フランスで活躍した重要な作家の優品も数多く含んでいます。

――――美術館の活動の中で、コレクションが形作られていった歴史を感じますね。他の出品作品も、安田さんの審美眼による「名品」なのですか？

S学芸員:うーん、意地悪な質問ですね……。近現代美術史における名品とは、美術をそれ以前とは決定的に違うものに変えてしまった、そんなエポックメイキングな作品だと考えます。ピカソの《アヴィニョンの娘たち》などがそれにあたるでしょうが、そういった意味では、今回の展示作品は「名品」と断言しづらいでしょう。しかし、「名品」につながるものと考えることは可能です。例えば、ピカソの《りんごとグラス、タバコの包み》は、《アヴィニョンの娘たち》を制作し、「キュビスム」と言われる複雑な造形実験を推し進めた後、より調和を重んじ幾何学的パターンを用いた古典主義時代の作品です。キュビスムという手法を、どのように作品に落とし込んでいくか模索している時代であり、この作品に見られるシンプルな幾何学化は、後のピカソの「名品」でも多く見られるものです。

――――美術史は「名品」だけで編まれるものではないのですね。細部を見ていく面白さもありそうです。では、この「フランス美術」の中で一番見てほしい作品はどの1点ですか？

S学芸員:今回、一番見てほしい作品は、ソニア·ドローネー《色彩のリズム》(No.7)です。ソニアは、夫のロベールとともに、キュビスムに強い影響を受けながらも、「色自体がフォルムであり主題である」という考えにいたり、色と形のみで構成される抽象絵画を初めて手がけた画家の一人です。本作は、パッチワークのようにカラフルな背景の前で、ふたつの半円からなるプロペラと色面の組み合わせが、リズムを刻みながら踊っているようにも見えませんか。

――――確かに、絵画のはずなのに、画面が動き出しそうな躍動感を覚えます！

S学芸員:ソニアは、こうした抽象絵画を描き続けますが、その出発点は日常生活にあります。彼女はロシアの農民たちのように、こどものために布の切れはしをつなぎ合わせてカラフルなベッドカバーを作っていました。それがソニアの抽象絵画の出発点となり、多くの芸術家たちに影響を与えることになったのです。

　もしかすると、今「あれ？」と思った方もおられるかもしれません。「フランス美術」の話をしていたのに「ロシア」……。実は、ソニアはロシア(現ウクライナ)出身の画家です。つい、一言で「フランス美術」と呼んでしまいますが、実は、今回「フランス美術」として出品した5点のうち、フランス出身の作家によるものは1点のみです。けれども、全員ともフランスで活躍した芸術家たちです。20世紀のフランスでは、国境を超えてさまざまな文化が混ざり合うことで、新しい芸術が生み出され、「今」の目から見る「フランス美術」が形作られていきました。

――――つい、「〇〇美術」と言ってくくりたくなってしまいますが、何をもってその地域とするのか、より意識して見なければなりませんね。S学芸員は、こうした作品たちとふくやま美術館をどのような美術館にしていきたいですか？

S学芸員:1点の作品から広がる世界をお見せすることができたらなと思っています。美術作品は、さまざまな背景を持っており、1点のみで鑑賞するとなかなかその魅力に気づけません。テーマを設けて展覧会を企画し、他の作品と比べて見ることにより、さまざまなことが見えてきます。その積み重ねにより、今回のコレクション展のような1点1点の作品を鑑賞する際にも、より広く、深い世界を味わっていただけるのではないかと思います。そのような、毎年作品に対する理解が深まっていく、来るたびに楽しみが増えていく、そんな美術館を目指したいと思います。

――――「名品」展というと「美味しいところどり」というイメージがありましたが、皆さんの積み重ねによって価値が生まれてくるのですね。お二人ともありがとうございました！

日本近現代美術 ――「名品」とは、時代を超えて伝わる卓越した技量なり！

――――次のスペースは、日本の作家による作品が並んでいますね。

O学芸員:ここは、日本近現代美術のコーナーです。また少し雰囲気が変わりますね。

――――たくさんの作品が並んでいるので、見ていくのが楽しみです。これらの作品を所蔵するにいたった経緯などはあるのですか？

O学芸員:これだけの日本近現代の作品が集まった経緯を振り返ると、始まりは美術館の開館前にさかのぼります。開館前年の1987年、福山市から運営を託されたふくやま美術振興財団（現ふくやま芸術文化財団）が、収集方針の3つ目に「日本の近・現代の美術」をあげました。今では700点を超えるまでになっています。「日本の近・現代美術」の範囲は幅広いものですが、福山・府中、神石高原町といった近隣地域、瀬戸内との関連性を重視しながら、集められてきました。当初から一貫して、「近代」美術にはふくらみをもたせ、第二次世界大戦後に当たる「現代」の美術については、主要な作品を系統的に集めることを目指しています。

――――名だたる作家の作品が並んでいますが、きっとどれも「名品」なのですね。

O学芸員:今回、これまでの当館所蔵品展で来場者に親しまれてきた代表的な作品や、特に見ていただきたい作品を「名品」としてあげました。例えば、岸田劉生の《麗子十六歳之像》（No.27）や、熊谷守一の《女の顔》（No.17）など、美術史からみて記念碑的な作品もあれば、草間彌生の《NO.X》（No.23）、靉嘔の《Violin on the chair》（No.24）といった、戦後における現代美術の動向を特徴づけるものなど、幅広く選びました。

――――確かに一口に「名品」と言っても、油彩画からヴァイオリンまでその形態はさまざまですね。

O学芸員:もとより、「名品」というと、国宝や重要文化財をはじめ、歴史的に重要な位置を占めるものや稀少性の高いものが頭に浮かぶでしょう。美術品の価値は、時代や個人の趣向によって、変わっていきますが、私にとって「名品」とは、造形や様式において時代を超越して伝わる、卓越した技量が感じられるもの、人々に感動を与えるものではないでしょうか。新しい作品においては、普遍的でありながら革新的なもの、「守破離」が感じられるものが相応しいと思っています。

――――たくさんの作品がありますが、個人的に一番見てほしい作品をひとつ選ぶとしたら、どの作品になりますか？

O学芸員:一番見てほしい作品は、岸田劉生の《麗子十六歳之像》です。白い額にすっきりとひかれた眉、少女像というよりも一人の女性としての面持ちと気品を漂わせているところが理由です。

岸田劉生は、ゴッホ、セザンヌ、デューラー、そして東洋と日本の美術の造形性に美しさの根源を見出し、見える物の内に潜む真実の美をその写実性の中に探求し続けた画家でした。この作品は、劉生が37歳の時に描いた作品で、1929（昭和4）年の正月に本作を含む2点の麗子像を油彩で描きました。そのうちの1点（笠間日動美術館蔵）は5月に完成していますが、この作品は画面右中に「己巳六月　劉生写」と年記があるとおり、6月まで時間をかけて仕上げられました。作品の近くに寄って見ると、一筆一筆、丁寧に描かれていることがわかります。

――――まさに、時代を超えて伝わる卓越した技量ですね！

O学芸員:岸田劉生の「麗子像」というと、教科書に載っていることもあり、多くの人がきっと《麗子微笑》（東京国立博物館蔵）や《童女舞姿》（大原美術館蔵）に描かれた「おかっぱ頭」の可愛らしい麗子の姿を思い浮かべられることでしょう。ところが、当館の作品は、初めて「桃割れ」という日本髪の晴れ着姿で描かれています。画面も縦に長く、浮世絵の大首絵風をならったものでしょう。この堂々とした表現は、12年にわたって描き続けた「麗子像」の集大成とも言えるのではないでしょうか。劉生は、この作品を描いた6ヶ月後、山口県の徳山（現·周南市）にて38歳の若さで亡くなります。「最後の麗子像」となったこの作品を見ていると、劉生が愛娘の麗子の存在に込めた深い精神性が感じられるのではないでしょうか。

――――そうした背景を踏まえて見ると、また麗子ちゃんの表情が、少し違って見えてきますね。とても豊かなコレクションがあることがわかりましたが、今後この作品たちはどのように活躍していくのでしょうか。

O学芸員:今回のような、所蔵品展における展示が主なお披露目の機会となりますが、全てをお見せするにはいたっていません。新収蔵品の目録作成や他館への作品貸出、さらにはSNSなどでも発信の機会を設けつつ、当館のコレクションが、より多くの人にご覧いただけるよう目指しています。コレクションの充実は、美術館の成長と、地域文化の振興に直結しているため、篤志家からの美術品の寄附も重要です。常日頃から美術館の運営·活動に多くの方からご賛同いただけるよう、館員、ボランティア、地域と相互に協働できる美術館を目指していきたいです。

――――今のコレクションの形が完成なのではなく、まだまだこれから多くの人の手によって、この美術館は育まれていくのですね。O学芸員、ありがとうございました！

No.27　岸田劉生《麗子十六歳之像》1929年

日本画 ―― あら、こんなところに「名品」が！

――――次の部屋は、展示室の奥にたくさんの屏風が！

N学芸員:これらはいわゆる「日本画」と呼ばれるジャンルの作品です。

――――あっ、日本画担当のN学芸員！そういえば、そもそも「日本画」とは、どのようなジャンルなのでしょう。

N学芸員:歴史をさかのぼると、明治維新後、西洋絵画を積極的に吸収しようとする動きがありました。それに対し、やまと絵や、狩野派をはじめとする漢画といった日本の伝統的な絵画を「日本画」と呼ぶようになったのです。

――――意外と新しいカテゴリーなのですね！

N学芸員:そうなのです。主に墨や膠で溶いた岩絵具を使い、絹や紙に描きますが、この描画材料が日本画の大きな特徴のひとつです。当館では、「福山市・府中市及び神石高原町関連作家の作品」という収集方針のひとつにのっとり、地域ゆかりの優れた日本画家による作品を収集しています。

――――今回出品している作品も、そういった作家によるものなのですね。

N学芸員:当館の所蔵作品の中で、その作家の代表作レベルのものを選びました。例えば大村廣陽《軍鶏》(No.36)は、《南国の水辺》に比べるとスケール感では及びませんが、気迫のこもった筆の運びから、代表作のひとつと言えるでしょう。堂々と立つ軍鶏の姿には力が漲り、満開の白梅は春の訪れの喜びを画面中に満たしているような充実した作品です。また大島祥丘《月下遊敖》(No.38)は梨の花が咲き誇る満月の夜に、鼬(いたち)たちが群れて遊ぶ様子を描いています。鮮やかな色彩で夢の中のような世界を描いた本作は、空襲で多くを失いながらも、胸に残る生きる希望をこの作品に託したように見ることもできるでしょう。

――――では、この中で一番見るべき作品はどれですか？

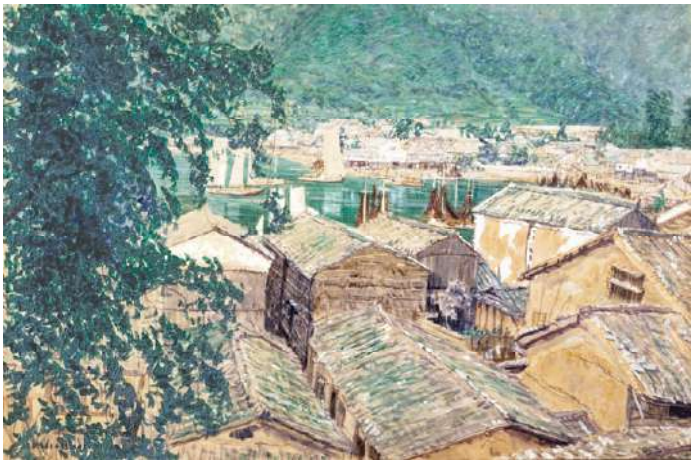
N学芸員:池田遙邨《林丘寺》(No.34)です。3年前私が当館に着任した年に、「あー！ここにあったんだ！」と、《みなとの曇り日》(No.33)とともに感激した作品です。遙邨作品が倉敷市立美術館にたくさん収蔵されているため、倉敷市在住の私にとって、遙邨は超ビッグネームでした。池田遙邨展はこれまで何度も見ましたが、《林丘寺》も《みなとの曇り日》も必ずと言っていいほど出品されているのに、所蔵館が当館だという事が抜け落ちており、恥ずかしい思いがしました。

《災禍の跡》や《貧しき漁夫》といった暗くて深刻な絵を、全力で描いて出展していた当時の遙邨は、落選が続いたうえ師の竹内栖鳳にも否定されていました。再起を期して大和絵や琳派、南宋画など古典に題材を求め、明るく鮮やかな色調で描いた《林丘寺》は、まさに遙邨再出発を告げる作品です。水彩で描き文展に初入選した19歳の作《みなとの曇り日》とともに、遙邨の記念碑的な作品が収蔵されていることを、多くのみなさんに知っていただきたいです。

――――そんな「名品」だったとは……。今後も大切に受け継いでいかなければなりませんね。

N学芸員:特に、日本画は、油彩画などに比べて材質上劣化しやすく、長期間の展示ができないため、計画的に公開していく必要があります。実際、神辺出身の日本画家、金島桂華については秋季所蔵品展(2025年9月27日～12月14日)において新収蔵作品を中心に紹介するため、今回は展示できませんでした。桂華の中国を題材にした珍しい初期作品や、本画が仕上がるまでの過程を知ることができる数々のスケッチや小下絵などで新たな桂華像をご紹介するため、目下準備中です。

――――金島桂華展も楽しみです！N学芸員、ありがとうございました。



No.33　池田遙邨《みなとの曇り日》1914年

No.34　池田遙邨《林丘寺》1926年

書 ――このスケール、これぞ「名品」っ書！

――――隣のスペースにも、屏風がありますが、花や鳥は見当たらず、ちょっと雰囲気が違いますね。

K学芸員:ここからは書のコーナーです。

――――書！美術館に書のコレクションがあるとは意外です。なぜ、書の作品が、ふくやま美術館に所蔵されているのですか？

K学芸員:実は、福山は書が盛んな地域で、福山にゆかりのある書家が作品を寄贈したためです。背景には、福山市出身のかな書家·桑田笹舟の存在が大きく関わっています。というのも、戦後まもない頃、桑田笹舟とその子弟らが、書家や書の教育者を育成するために、当時書壇で活躍していた漢字作家·村上三島や、かな書家·宮本竹逕、前衛書家·宇野雪村らを講師として福山に招き、書の講習会や練成会を開催しました。本展に出品している、かな書家·桑田三舟と漢字書家·栗原蘆水も、これを契機として書を志した人物に数えられます。

さらに、桑田笹舟は地域の文化振興にも尽力し、1986年には、それまでに書き溜めた作品から200点を自選し、当時まだ建設予定であったふくやま美術館に寄贈しました。その後、1990年に当館で開催した「桑田笹舟名品展」を機に、新たに43点の作品が寄贈されることとなりました。

――――そのような経緯があったのですね！書が盛んな地域だったとは……福山、すごいっ書！今回、作品は3点並んでいますが、これらももちろん「名品」なのですね。

K学芸員:ふくやま美術館に桑田笹舟の作品は243点所蔵がありますが、今回は同施設内にあるふくやま書道美術館所蔵の《日月》(No.42)を出品しました。本作は、2000年に当館で開催した「生誕100年　桑田笹舟展」にも出品した作品です。料紙と書の調和が美しく、「桑田笹舟と言えば……」真っ先に思い浮かぶ代表作です。一方、当館の桑田三舟作品3点のなかで、《春秋》(No.43)は最も晩年の作品。直筆で穂先を紙に食い込ませるように書き進めるところと、軽やかな筆運びとの対比が豊かな筆線を生み出しています。さらに、《郷里の歌》(No.44)は当館が唯一所蔵する栗原蘆水の作品。字形を扁平にとりつつ、懐が広く、また簡素でありながら雄大な空気を纏うような書風です。

――――この中で、個人的に一番見てほしい作品は……。

K学芸員:桑田笹舟《日月》です。桑田笹舟の書を語る上で欠かすことのできない「大字かな」作品です。
現代では書道界に定着している「大字かな」ですが、戦前にはこのようなジャンルはなく、巻子や帖といった形式で、小字による表現が主流でした。しかし1948年、日展に書が第五科として創設された頃、壁面芸術としてのかな表現を模索しようと、関西の7人のかな書家たちが自らを「七人の侍」と称し立ち上がったのです。桑田笹舟は7人のうちのひとりで、全国各地で講習会を開き、「大字かな」の普及に努めました。本作は、他のかな書家らと「大字かな」を創造した笹舟自身が、平安古筆を新たな形として昇華した名品と言えるため、最も見てほしい作品です。

また、「料紙は書家の家」と言った笹舟は自ら版木を彫り、紙を加工しましたが、本作は料紙と書の調和がひときわ美しく目を引く屏風です。タイトルの通り、日(太陽)と月の対比がモチーフとなっており、右隻に書かれた和歌の「あさ日いま…」の「日」の字は墨で書くのではなく、料紙の装飾によって表すという遊び心も盛り込まれています。

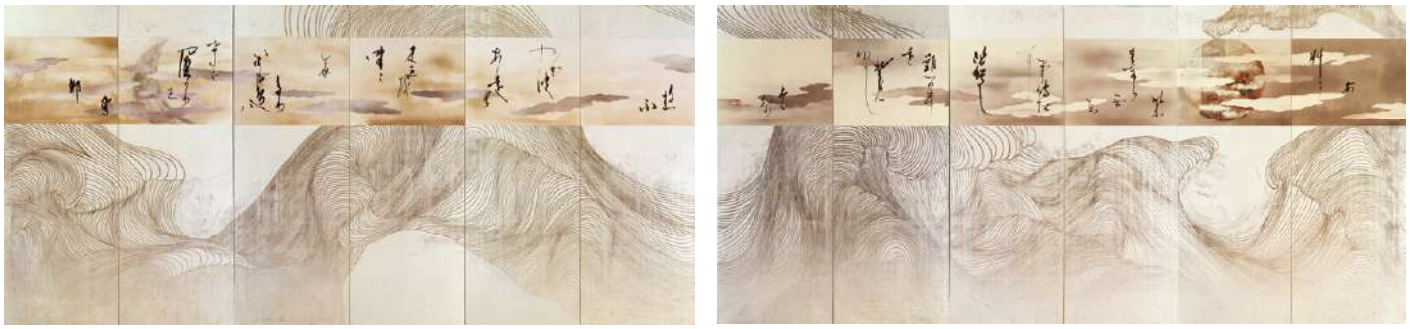
ご覧の通り大きくて、所蔵館のふくやま書道美術館では一双あわせてお披露目できる機会がなかなかありませんので、この機会にぜひご覧いただければと思います。

――――スケール感も相まって、優美でありながら圧倒的な存在感ですね。ふくやま美術館とふくやま書道美術館の連携がうかがえるエピソードでもありますが、これから書のコレクションはどのように展開するのでしょうか。

K学芸員:書のコレクションとしては、ふくやま美術館では桑田笹舟作品を中心として、近現代の作家による書作品を所蔵しています。一方、ふくやま書道美術館では、栗原蘆水が長年にわたり蒐集した日中書画文房古玩を中核として、他にも桑田家コレクションや、福山ゆかりの書家の作品を所蔵しています。

書道美術館は2020年の夏頃から、ふくやま美術館の2階に仮移転している状況です。大規模改修を控えたいま、改めて、両館が協力し所蔵する書の魅力を再発見することで、言わば相乗効果的にその魅力を広く知っていただけるよう、書のコレクションを活用していきたいと思います。そういった思いもあり、本展にも書道美術館所蔵の作品を出品しました。

――――両館の連携や、大規模改修など、今後の展開がとても楽しみです。ありがとうございました！



No.42　桑田笹舟《日月》1986年（ふくやま書道美術館蔵）

刀剣 ―― 魅惑の「名品」一挙公開！

――――そろそろ、展示も最後の部屋に……。おや、H館長ではないですか！

H館長：おぉ、こんにちは。展示を見にきてくれたのかな。

――――はい！久しぶりに所蔵されている刀剣が全14口お目見えと聞きました[1]。せっかくなので、いくつか質問してもよろしいですか？

H館長：はい、いいですよ、どうぞ。

――――なぜ、これだけの刀剣作品が、ふくやま美術館に所蔵されているのですか？

H館長：ふくやま美術館の刀剣は福山市に在住した株式会社エフピコ創業者の小松安弘氏が所蔵されていたものでした。もともとは東京の青山孝吉という愛刀家のコレクションで、氏の没後それを買い取った人を経て小松安弘氏が入手したものです。入手後、当館に寄託されていましたが、小松氏の没後、2018年に小松家から寄贈を受けました。国宝が7口あり、これは東京国立博物館と徳川美術館に次いで多い数です。

――――そんなにたくさんの刀剣があるのですね。普段あまり目にする機会のない刀剣ですが、「名品」というとどのようなものになるのでしょうか。

H館長：現在、日本にある日本刀は250万本といわれています。反りのあるいわゆる日本刀が誕生したのは平安時代中期およそ11世紀初め。平安時代には山城（京都）、伯耆（鳥取）、備前（岡山）、九州に刀工が現われ、鎌倉時代にはほぼ日本全国に刀工が存在するようになりました。日本刀は地域、流派、時代によって様々な作風が展開され、個性を発揮した刀工が登場します。日本刀の見所は姿形の美しさ、鍛えの上手さ、そして刃文の構成が破綻無く整っていることなどにあります。そうした技術的な優秀さと刀工の個性をはっきりと表したものが「名品」と呼ばれているのです。ふくやま美術館の刀剣は、各時代、流派を代表する名工が作ったもので、しかもその刀工たちのもっとも優れた作品といえます。

――――刃文や切先の形状など、ひとつひとつ異なる表情をしていますね。この中で、みてほしい刀剣を一口選ぶとしたら、どれを選ばれますか？

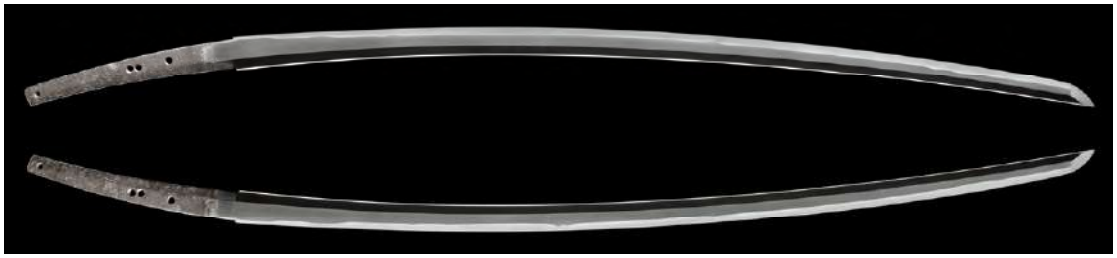
H館長：ふくやま美術館の7口の国宝は、どれもが個性があって魅力的ですが、私がひとつ選ぶとしたら、正恒の太刀（No.50）です。正恒は備前ではもっとも古い平安時代後期の刀工です。友成とともに古備前の双璧といわれています。国宝に指定されている刀剣は約120点ありますが、正恒は古備前では最も多く4点が指定されています。その中でも当館所蔵の正恒は姿の美しさでは随一だと思います。姿だけでなく、鍛えも良く、刃文も整っていて見飽きません。専門的になりますが、細身で腰反りの高い姿は優美で、鍛えは板目がよくつんで映りが立ち、刃文は直刃調に小乱れ、小丁子が交じって足が頻りに入り、沸がついて、それが銀河の星のようにきらめいてみえます。鍛え、刃文ともに完璧な出来映えを見せていて、見ていて飽きることがありません。

――――本当にじーっと見ていると、刃のきらめきに吸い込まれそうです。貴重なコレクションであることが感じられますが、今後、どのように活用されていくのでしょうか。

H館長：定期的な常設展の展示や、他館の展覧会への貸し出しをはじめ、コレクションに関連する作品を中心に、他館や個人所蔵の作品を借用した特別展を企画しています。2年前には「江雪左文字展」を、1年前には「正宗十哲展」を開催しましたが、こうした特別展によって、当館の所蔵する刀剣の歴史的位置づけや、刀工の比較研究が可能となります。今後、刀剣に対する理解がより多くの方に深められるよう、そして学術研究も進められるよう、美術館も努めていきたいです。

――――ありがとうございました！

――――現在のふくやま美術館のコレクションの姿を、お楽しみいただけたでしょうか。当館の「名品」たちを、未来の福山へ、学芸員と地域の皆さまと一緒に受け継いでいきたいですね。時折「名品」の顔を見に、そしてあなたにとって一番の「名品」を探しに、美術館を訪れるのも良いかもしれません。またぜひお会いしましょう。



No.50　国宝《太刀　銘正恒》

編集：筒井彩（ふくやま美術館 学芸員）

【註】
(1)コレクション14口のうち、国宝《短刀　銘左/筑州住》（No.51）と、国宝《太刀　銘則房》（No.58）は4月3日（木）～13日（日）までの展示。

ふくやま美術館所蔵品展示目録　No.170
発行日／2025年4月2日　編集・発行／ふくやま美術館（広島県福山市西町2-4-3）　印刷／二葉印刷有限会社